

## II. 寄稿

### 1. 金属と著名人 第6話 -チタンと女流作家紫式部-

伊藤忠鉱物資源開発株式会社 五味 篤



図1 紫式部



図2 花山天皇



図3 一条天皇

世界最古で最長<sup>(注1)</sup>の女性文学といわれる「源氏物語」と「紫式部日記」を著した紫式部(図1)は、中古三十六歌仙および女房三十六歌仙の一人とされ、子供時代から晩年に至るまで自らが詠んだ和歌 120 首を選んで収めた家集「紫式部集」のほか、「小倉百人一首」に和歌が収められ、「拾遺和歌集」以下の勅撰和歌集にも計 51 首が収められている。「紫」の称は「源氏物語」または作中人物「紫の上」に由来すると考えられている。その生年没年は不詳で諸説あるが、天延元年(973 年)に生まれ、長元4年(1031年)1月に58歳で亡くなったとされる。

父親は官位正五位下の下級貴族であった藤原為時<sup>(注2)</sup>で、花山天皇(在位 984—986 年:図2)<sup>(注3)</sup>の皇太子時代に御書始めの副侍読を務めるほど著名な漢学者であった。為時は花山天皇の側近として式部大丞、蔵人と出世したが、天皇が寛和 2 年(986 年)に「寛和の変」で退位すると、10 年に渡って散位(位階のみで官職を持たない事)に追い込まれた。一族には文辞を以って聞こえた人が多く、紫式部も幼少の頃より漢文を読みこなしなど、才女としての逸話が多い。父親が紫式部の弟惟規に漢詩を教える際に、横で聞いていた紫式部の方がずっと覚えが良かったため、父親は「男子にて持たらぬこそ幸ひなかりけれ(お前が男でないのが勿体ない)」と残念がったという。

為時は長祿 2 年(996 年)に、一条天皇(図3)<sup>(注4)</sup>に女官を介して漢詩「苦学寒夜 紅涙霑襟 除目後朝 蒼天在眼」(寒い夜に耐えて勉学に励んでいたが、人事異動では希望する官職に就くことができず、失意と絶望で血の赤い涙が袖を濡らしている。しかし、この人事の修正が朝廷で行われれば、青く晴れ渡った空の恩恵に感じ入って、その蒼天に更なる忠勤を誓うだろう。)を奉じたところ、無念さを見事に歌い上げたとして高く評価され、これを機会に長徳2年(996 年)夏に越前国司に任官された。当時の越前では宋人の大量流入問題があつて、漢詩の知識の豊富な為時に交渉役を期待したというのが実情らしい。

紫式部も生涯でただ一度だけ京都を離れて老齡の父親に随伴し、1 年余り当時の越前国府であった武生で暮らした。雄大な自然や文化に触れた越前での暮らしは、才能ある紫式部の感性をさらに豊かにしたとされ、「越前富士」の異名を持つ山容の日野山(794.5m:写真1)について、京都の小塩山(642m:写真2)と重ねて詠んだ歌も残されている。京都に比べて越前の豪雪は、紫式部にとって初めての驚くべき経験であった。

ここにかく 日野の杉むら 埋む雪 小塩の松に けふやまがへる

(この地でこのように日野山の杉木立を埋めるように降っている雪、都の小塩山の松にも今日は雪が降り乱れて降っているのであろうか。)

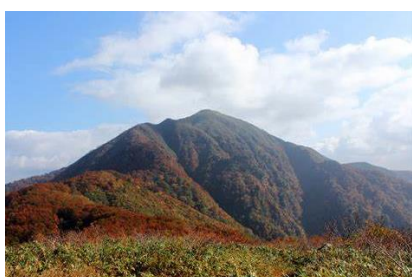


写真1 日野山(標高 794.5m)



写真2 小塩山(標高 642m)

長徳 3 年(997)が明けると、二十歳ほど年上で、既に女性 3 人との間に数人の子供があり、父親の上司にもあたる藤原宣孝から紫式部に求婚の書状が届いた。結婚の決断を迫られていた紫式部が、心を解かすべきかどうか悩む心境を伺わせる歌も残っている。

春なれど 白嶺のみゆき いや積もり 解くべきほどの いつとなきかな

(春にはなったが、こちらの白山の雪はいよいよ積って、おっしゃるように解けることなどいつのことか)

結局、求婚を受け入れて、長徳 3 年(997 年)晩秋に、父親を越前に残して京都に戻り、長徳 4 年(998)の冬に結婚した。翌年長保元年(999 年)に一女・藤原賢子<sup>(注-5)</sup>を儲けたが、早くも長保 3 年 4 月(1001 年 5 月)に宣孝とは疫病で死別してしまった。その後、寛弘 2 年(1006 年)もしくは寛弘 3 年(1007 年)より、藤原道長(図4)<sup>(注-6)</sup>の長女で一条天皇中宮の



図4 藤原道長

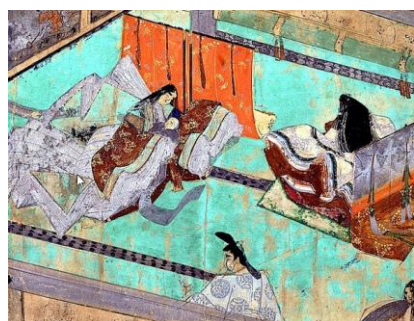


図5 藤原彰子

藤原彰子(図5)<sup>(注-7)</sup>に女房兼家庭教師役として仕え、少なくとも寛弘 8 年(1012 年)頃まで奉仕し続けたとされる。

「源氏物語」は宣孝との死別後の頃から書き始め、9年後の彰子に仕えている間に完成させたものと推定される。「紫式部日記」は 1008 年から1010年の宮廷での様々な出来事を記録したもので、同僚女房の和泉式部<sup>(注-8)</sup>、赤染衛門<sup>(注-9)</sup>や、「枕草子」が有名になっていた清少納言<sup>(注-10)</sup>など、宮廷での多くの人達に対する人物評にも触れている。

紫式部が住んだ越前国武生・鯖江地方は、雪深く農業の他に産業がない地域であったため、地元民によって古くから手工芸品による地場産業の育成の努力が図られた。打刃物は京都の刀匠千代鶴国安が移住し刀を作る傍ら、1337 年には鎌も製造され、越前を代表する伝統産業となった。打刃物や漆器などの越前ならではの複数の伝統技術がそれぞれに発展を遂げ、850 年頃に釘を使わずに木の板や金属の棒などを用いて指し合わせる指物技術によって箆筒、什器、調度品、建具などの越前指物が根付いた。

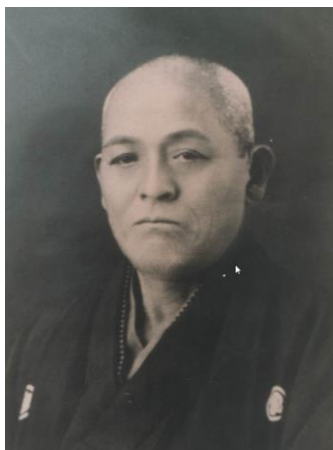


写真3 増永五左衛門  
(1871-1938 年)

1905 年に国産眼鏡の祖とも呼ばれる増永五左衛門(1871-1938 年:写真 3)<sup>(注-11)</sup>が、指物技術を応用して手作業で眼鏡の生産を始めた。大阪から眼鏡職人の米田与八を福井に呼び寄せ、東京から眼鏡職人豊島松太郎を招き、夜間学校を開いて農家の次男、三男などの人材を育成した。増永は一人でも多くの優秀な技術者を独立させることに情熱を注ぎ、独立の際には資金を渡し、援助も行ったが、根気強い県民性も後押しして、後に日本最大の眼鏡生産地へと発展していった(写真 4)。



写真4 明治時代の眼鏡工場

当時、金属フレームの殆どがニッケル合金製で、加工性には優れているものの、比重が重く、さらに錆びやすいという欠点があった。1981 年に世界で初めて、軽くて丈夫で、発汗による錆にも強い、チタン製眼鏡フレームが開発され、幾多の試行を重ねて生産に成功した。高品質な眼鏡を製造するために、航空宇宙用など極一部に使われていただけの特別な材料であるチタンに着目した結果であった。さらに当初は純チタンを使用していたが、高強度や高いバネ性などの高機能化が追及されるに従って、難加工性を克服してチタン合金や超弾性チタン合金が使用されるようになった。チタン製眼鏡フレームの溶接には、部品に直接電極を接触させ、金属

の抵抗発熱を利用する抵抗蝟付法が用いられてきたが、2009 年のレーザ微細溶接の製品開発によって、溶接の精度と強度が向上した。チタン製眼鏡フレームは世界から脚光を浴び、越前が眼鏡フレーム産地としての国際的な地位を上げるきっかけとなった。9工程(デザイン・金型・プレス、切削、蝟付、研磨、検査、表面処理、仕上)をパーツごとに分業化することで、町全体



がひとつの大きな工場として眼鏡作り機能を達成することになって、日本の眼鏡フレームの約95%、世界の約20%を生産し続けるまでになった。また、チタン製眼鏡フレーム加工の際に得られた素材加工技術は、医療、IT、電子機器の分野でも応用され、日本における加工技術革新に一役かっている。

紫式部の享年は40代後半～50代あたりだと考えられるので、平安時代に老眼鏡が存在していたのなら、老眼を克服しながら「源氏物語」の続編を書き続けていたかも知れない。

- (注-1) 源氏物語は54帖からなり、文字数は約100万文字で、400字詰め原稿用紙相当で2,400枚となり、物語は70年余の経緯が書かれ、登場人物は光源氏をはじめ500人を超える。
- (注-2) ようやく官職に就いた為時は順調に職務を果たしたらしく、寛弘6年(1009年)に正五位下・左少弁、2年後には越後守を拜命するが、越後での任期半ばの長和3年(1014年)に辞任、帰京した。なぜ為時が帰京したのは不明であるが、一説には紫式部を亡くしたからと言われている。また、越後赴任の年には長男の惟規にも先立たれたことも大きいとされる。京都に帰った為時は長和5年(1016年)に三井寺で出家し、長元2年(1029年)に没した。
- (注-3) 花山天皇(968-1008年)は、日本の第65代天皇(在位:984-986年)藤原為光の娘・祇子(969-985)を女御とし深く寵愛したが、出産中に死去、嘆き悲しんだ天皇は供養のためと称し986年に内裏を抜け出して仏門に入り退位した(寛和の変)。
- (注-4) 一条天皇(980-1011年)は、日本の第66代天皇(在位:986-1011年)。この時代は藤原氏の権勢が最高域に達し、紫式部、清少納言、和泉式部などの女流文学が開花した。人柄は温和で好学だったとされ、文芸に深い関心を示し、音楽も堪能で、多くの人に慕われた。
- (注-5) 藤原賢子(999-1082年) 紫式部の一人娘。大式三位の女房名を持つ。女房三十六歌仙の一人である。
- (注-6) 藤原道長(966-1028年)藤原一族の左大臣として政権を掌握した。一条天皇に長女の彰子を入内させ中宮となし、さらに次の三条天皇には次女の妍子を入内させて中宮とした。その後、三条天皇とは対立したため退位に追い込み、彰子の生んだ後一条天皇を即位させ、摂政となった。さらに後一条天皇には三女の威子を入内させ中宮としたばかりでなく、六女の嬉子を後の後朱雀天皇となる敦良親王に入侍させた。
- (注-7) 藤原彰子(988-1074年) 藤原道長の長女。12歳で一条天皇のもとへ入内し、後一条天皇を生み国母となった。聡明で優しく思慮深く「賢后」と称された。
- (注-8) 和泉式部(978-没年不詳) 中古三十六歌仙、女房三十六歌仙のひとりで天才肌の歌人であった。
- (注-9) 赤染衛門(956-1041年) 中古三十六歌仙、女房三十六歌仙のひとり。
- (注-10) 清少納言(966年頃-1025年頃) 随筆「枕草子」を執筆。
- (注-11) 福井市郊外の豪農増永家の長男として生まれた。福井では降雪が多く、田畑が少なく、特段の特産物もないために、庶民生活は貧しかった。何か地場産業を興せば生活水準も上昇すると考えていた折に、五左衛門の弟、幸八が眼鏡作りを提案、1904年に実行に移した。しかし、材料仕入、資金手当、品質、販売先などの難関が立ちほだかり、製品を上市するのは困難を極めた。品質の向上に大きく貢献したのが「帳場制」で、上に責任者となる職人の親方グループを作り、その下に弟子たちを置くという製造体制を

構築し、トップである五左衛門はそれぞれの親方へ仕事を注文し、出来上がった眼鏡を一手に引き受けるものであった。当時の職人たちは帳場同士で腕を競い合いながら技術を切磋琢磨したため、福井の眼鏡の品質は飛躍的に向上した。

#### 参考文献

繁田信一(2019):殴り合う貴族たち—平安朝裏源氏物語. 角川ソフィア文庫.

繁田信一(2023):悪い平安貴族 殺人、横領、恫喝…雅じゃない彼らの裏の顔.PHP研究所.

歴史の謎を探る会(2023):紫式部と摂関政治の時代がよくわかる本. 河出書房新社.

#### 写真・図説明

写真1 野山(標高 794.5m) 福井県越前市と南条郡南越前町にまたがり、白山、越知山、文殊山、蔵王山とともに越前五山として山岳信仰の霊山とされてきた。

写真2 小塩山(標高 642m) 京都府京都市西京区にあり、大原野西嶺上陵(淳和天皇陵)がある。

写真3 増永五左衛門(1871-1938年)

Story of Masunaga <https://www.masunaga1905.com/story> より転送

写真4 明治時代の眼鏡工場 Story of Masunaga <https://www.masunaga1905.com/story> より転送

図1 紫式部 土佐光起筆(石山寺所蔵)

図2 花山天皇 月岡芳年画「月百姿 花山寺の月」

図3 一条天皇 [ja.wikipedia.org](http://ja.wikipedia.org) (真正極楽寺蔵)

図4 藤原道長 紫式部日記絵巻(藤田家本第5段絵(部分))

図5 藤原彰子 源氏物語絵巻若紫断簡